

チョコレートやワッフルなど、
おいしいお菓子の国として
世界的に有名なベルギー王国の中でも、
特に権威のある「ヴィタメール」社。

1910年創業——

ベルギー王室の特別なパティや、
結婚式には必ず「ヴィタメール」社の
お菓子が提供されてきた。
世界のチョコレートを集めたガイドブック
「THE CHOCOLATE COMPANION」
では最高の三つ星を冠している。



比屋根毅は、
長い間あこがれ続けたこの老舗ブランドと、
ついに提携し「ヴィタメール・ジャポン」を設立した。
それは、二人の経営者の、菓子づくりへの
情熱が結びつけたものであった。

情熱の洋菓子職人

The artisan spirits ~Tsuyoshi Hiyane Story~

比屋根毅物語

〈第十一話〉

漫画：佐藤 晴美

(大手前大学 メディア・芸術学部 講師)

1987年
ヴィタメール・ベルギー本社

こんにちは
ムッシュ・ヴィタメール
お忙しいところ
お会いできて
大変光榮です

ヴィタメール社社長(当時)
アンリ・ギュスター・ヴ・ヴィタメール

ええ
ムッシュ・ヒヤネ

ワールドケーキフェアでの
グランプリ受賞
おめでとう



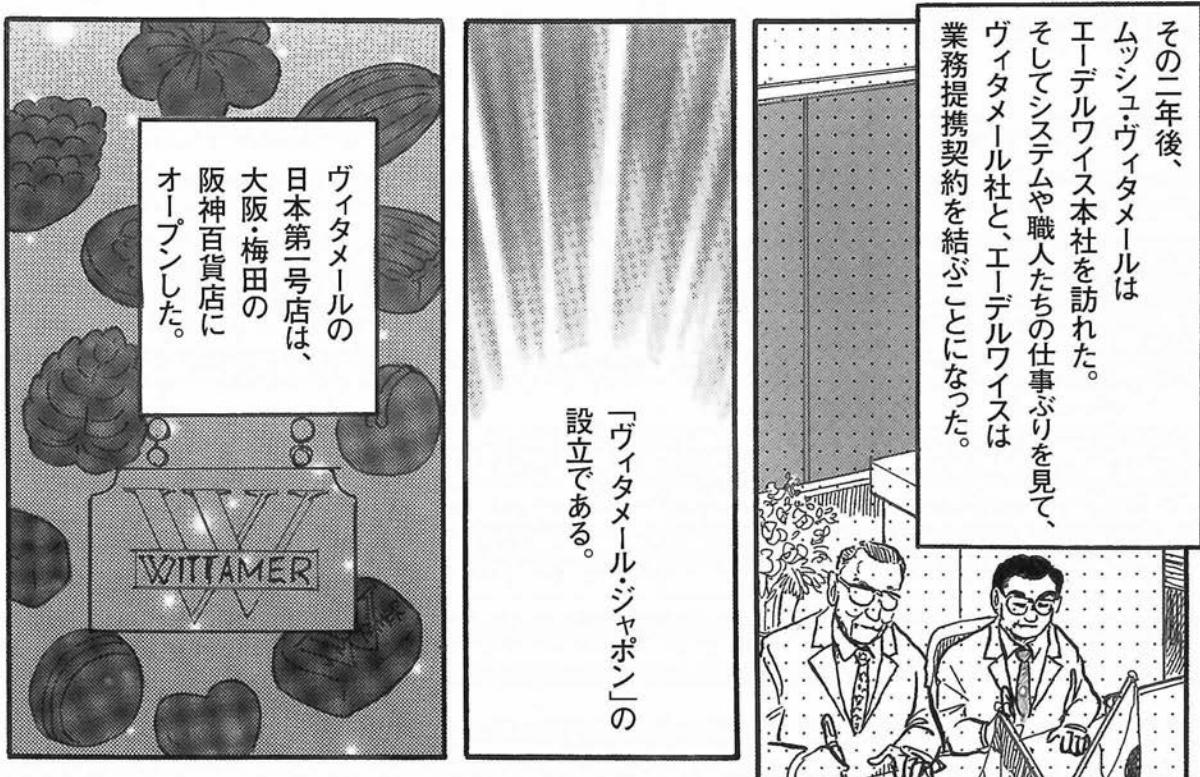
二人は互いの
「味へのこだわり」について
意気投合して話を続けた

私はまだ
会社をおこす前、
ヨーロッパの
さまざまな国で
お菓子の修業を
してきました

ええ
そして伝統の技と味に
こだわり続ける
ヨーロッパの一流ブランドを
ぜひ日本に紹介したいと
考え続けてきました











毅はヴィタメールに職人を派遣し、技術を学ばせることはもちろん、日本人の好みにあわせて

商品を改良するなど

さまざまな試行錯誤が繰り返された。

なるほど
日本人にとっては
ケーキの大きさが
大きすぎるので
ないでしょうか

甘さを少しだけ
抑えた方が
日本人の口に
合うようです

すぐ
作ってみよう
じゃないか

そして、ヴィタメール本社に
派遣された技術者たちも、
めきめきと力をつけていった。

日本の売り場に関しては
ムッシュ・ヒヤネに
すべてまかせて
いるんだよ

現在、ヴィタメールは
全国に15の店舗を設けており、
もつとも成功した洋菓子の
海外ブランドのひとつとして
高い評価をうけている。

ここまで来るのでに
20年近くかかったんだ
長い時間をかけて
人を育て、
店を育てたんだよ

でも手仕事と
手づくりの精神だけは
変えなかつた

ムッシュ・ヒヤネ
きみにヴィタメール社への
経営参画をお願いしたい

2006年、
アンリ・ヴィタメール氏は、
息子のポール氏、娘のミリアムさん、
そして妻である
イヴォンヌさんとともに、
毅を呼び、こう言った。

良いものは
必ず売れると
信じてきた

!





続子安

出石アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

前号の続き、川見こやすさんの話である。

* * *

それまでわたしは、自分の境遇をだれにも聞けなかつてん。うすうすなんかおかしいなとは思てんけど、これは聞いたらあかんことやと思つた。

よし子姉ちゃんは、わたしに意地悪のつもりではなかつたんよ。可愛がつてくれてはつた。わたしがなんにも知らんのが可哀想やと思たらしい。ほんで、ある夜、並んで寝てる布団の中で教えてくれはつてん。

わたしの名前は「こやす」です。親がつけてくれた名前どちがつて、これは別の叔母さんがつけてくれたらしいの。子安地蔵に因んでね。だけどわたしは漢字で「小安」やと思ってん。だれにそう教えてもらつたか覚えてないけど、そう信じてん。だから、ずっと学校でもどこでも小安で書いてた。それで通つてん。後に結婚する時になつて戸籍謄本見たら、平仮名の「こやす」やつてんやん。わたしはほんまに自分のことなんにも知らんかつたん

くしてくれはるんやろと思ててんけど、その人が実は父親やつてん。

よし子姉ちゃんの話を聞いてたら、天井の模様が滲んできて、わたし布団の中にもぐりこんだ。別に悲しかつたわけやないんやけど、なんかしらん涙が止まらんようになつてしまつた。よし子姉ちゃんは悪いことないんやけど、「かんにん、かんにん」と言わはつた。

わたしを生んだ人は、淡路島にいてはるて。それで解つてん。時々松山の家に来てはつた淡路島の親戚のおじさんが、わたしに優しくしてくれてはつた。「こやす、こやす」ゆうて、呼び捨てにしながら小遣いをくれたりしてね。なんでそんなに優し

わたし、高校には行つてません。中学出てすぐになりました。

初めて給料もらつて、自分の好きな物を買つて食べられた時、「ああ、幸せやなあ」で心から思た。それから、料理・和裁・生け花・お茶やらいろんな習い事を次から次にやつたんよ。

結婚は昭和43年。25歳の時やつた。紹介してくれ

はる人があつてその人と会つた

んやけど、なんか話が合わなく

て一度は断つたんよ。だけど縁

があつたんやね。結婚してしま

いました。今の主人です。

でもすぐに「しまつた」と思た

んよ。だつて、新婚旅行の車中

で、「ぼく、借金ある」て言わはつ

てんもん。結婚式費用や所持持

つためのお金もみな借金しては

つてん。だから、新婚早々から、

借錢払いやつた。

しかも主人は酒を飲んだら人

が変わつてね。そらひどかつたんやから。時には仲人さんのどこに逃げたりして。だけどわたしには帰るところなかつたからねえ。ほんで、二回毒を服

んだ。でも助かつてしまつてん。死ねなかつたんよ。不思議やつた。だけど思い当たることがあるの。主人のお父さんは主人の三才の時に亡くなつてはる

んやけどね、わたしはその仏さんを大事に祀つてね、お供えしたご飯を下げた時、いつもわたしがいただいてたの。だからそれが毒消しになつて助

けられたと思うんよ。

わたしを生んだ人に初めて会つたのは、わたしが初めての子を生んだ時。見に来はつた。わたしにそつくりの人やつた。気持ち悪いくらいにそつくりやつた。だけどちつとも情がわかへんかった。「お母ちゃん」とは呼べなかつてん。呼ぼうとも思わなかつた。



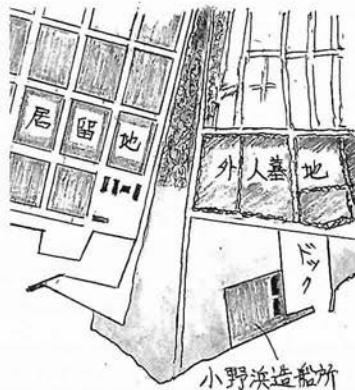
その後、何年も会うことはないが、あつた。ところが、淡路の実家で結婚式があつた時に呼ばれてね、二人の子どもも一緒に一家四人で初めて行つたんよ。だけど、親や親戚や言われてもわたしはやつぱりちつとも情がわかへん。何も話すこと無くて間が悪くてね、困つた。そんなわたしを見て主人がね、「お母さんに話をしたげんかえつ!」て怒つてね、だけど、共通の話題は無いし、いい思い出も無いし、何を喋るんよねえ。そんなわたしの態度に、わたしを生んだ人も間が悪そうにしてはるだけやつた。

わたし、今にして思うねん。やっぱり生きて来て良かつたな、て。だつて自分の子ども一人を自分で育てられたんよ、自分で。

■出石八アカル(はずし・あかる)一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」(同人)、兵庫県現代詩協会会員。詩集「ヨーヒーカブの耳」(編集工房ノア刊)にて、二〇〇一年度第三十回フルーメル賞文学部門受賞。

『神戸異人館物語』

夜明けの ハンター



ハンター肖像

永遠の惜別

明治十六年の初冬の大気が静かに兵庫を包んでいた。が、その静寂が一発の銃声によって打ち破られてしまったのである。つい先日、キルビーと出かけた布引の滝。そこから流れ落ちる水がまっすぐ南に下って、大阪湾に注ぐ新生田川の河口にある小野浜造船所で、雑用をしていた志津が突如、轟音を聞いた。耳を激しくつんざくような鋭いその音は志津にとって初めて体験する音であった。

「キャア！」

思わず驚きの声を上げると、手にしていた皿を土間に落とすのと同時に、皿が割れるのもかまつていられず、志津は音のした方へと駆けて行つた。事務所を出たところで、キルビーが倒れていた。

「あなた！」

志津がかがみ込んでキルビーの上体を抱える。

三条杜夫
絵・谷口和市

キルビーの右手に拳銃が握られている。今しがた志津が聞いたのはキルビーが自分のこめかみに撃ち込んだ拳銃の音であった。血が流れ出しておいて

みるみる志津の着物を赤く染めていく。

「誰か！ 誰か来て下さい！」

作業場の方に向かつて大きな声で呼んでおいて志津はキルビーの体をゆさぶる。

「あなた！」

後は言葉にならない。キルビーはすでにぐつたりしている。

「あなた！」

キルビーは虫の息だ。が、志津の呼びかけによく、かすかに反応を示した。拳銃を地面に置き、その手を志津が握る。

「何故？ こんなことを？」

「…志津…ソーリー…」

それだけ言うのがやつとだった。作業場から駆けつけた従業員たちが遠巻きにキルビーと志津を見守る。

「血を、血を止めて！」

志津の叫びに、従業員たちが、あわてて手ぬぐいを見つけるなどして、キルビーのそばに駆け寄る。作業長が率先して、キルビーの手当をする。

「救急袋！」

「はい。ここに！」

キルビーの額に手ぬぐいを巻くのが精一杯で、薬を塗りつけて対処出来る程度の傷ではない。ぐるぐる巻きにした手ぬぐいが鮮血に染まる。

「あなた！」

キルビーの上体を抱えて自らの膝で支えて、志

津がキルビーの意識を取り戻そうと必死に呼びかける。

「…志津…」

あとはかすかなうめき声。言葉にはならない。うすゆく意識のなかで、キルビーがうつろなまなざしで見ているものは、子供のころの自分の姿であつた。イルランドの春である。遠くに海が見える丘の上に白い花が咲き乱れている。一面の花畠の中を男の子が駆けている。離れたところで両手を広げて待ち受けている女性がいる。

「ママ…！」

女性がにこやかに笑っているのに、近づけない。海が近づいて来て、嵐のなかを帆船が行く。大波の向こうから女性の呼ぶ声が聞こえる。

「あなた！」

志津の声であつた。うつろなまなざしの中に、ぼんやりと見えるのは志津の顔である。

「サンキュー…」

それだけ言うのがやつとだった。かすかな記憶の向こうに、大名列供割り事件の責任を取つて腹切りをした侍のシルエットがかすかに浮かんでくる。それがすっと消えたのは、鋭い鳥の鳴き声がしたからである。百舌の声である。つい先日、志津と二人で聞いた百舌の声。「百舌のいけにえ」と言う狩りをする鳥であるということに興味を持つたキルビーであった。布引の滝で楽しい時間を過ごし、気分の転換をはかつて今後への意欲を新たにたくわえたはずであった。そのキルビーが思いがけない行動に出た。まさに寝耳に水の志津であつた。

「志津・・・サンキュー・・・」

もはや虫の息で、それだけ言うのがやつとのキルビーである。異国の地で、四十数年の生涯を今、閉じようとしている。彼が拳銃を持っていたことは全く気付いていない志津であった。まさか、拳銃でこうして自殺することなど、志津も従業員の誰もが想像だに出来ないことがあつた。積極性に富むキルビーが、英國を離れて日本に来て、目を見晴らせるような活動を開催してきた。最近は事業が思わしくなく、苦境に立たされた毎日であつたことは志津にも痛いほどよく分かっていた。だからこそ、せめて精神的にそんな彼を一生懸命に支えてきた志津であつた。が、こんな形で終焉を迎えるとは。悲し過ぎる現実であつた。志津の涙がキルビーの頬に落ちた。志津の嗚咽が始まつた。二人を取り囲む従業員たちもまた、男泣きするのであつた。

大阪で、ハンターが愛子と共に、門田三郎兵衛宅を訪ねるべく、歩いている時、思いがけなく、愛子の下駄の鼻緒が切れた。一瞬、二人の間に悪い予感のようないいが走つた。

「心配要ラナイ。下駄ノ鼻緒ハ切レルノ当タリ前デス。切レタ鼻緒ハ結ベバイ！」

と愛子を慰めるハンター自身、何かわからぬままに胸騒ぎがした。持ち合わせていた手ぬぐいを切り裂いて、鼻緒の応急処置をして、とりあえずは、門田宅までたどり着いた一人であつた。いつも愛子も、ほつと胸を撫でおろすのであつたが、ちょうどそのころ、兵庫の小野浜造船所で、キルビー

が、拳銃自殺をとげていたのである。一人がそのことを知るのは、翌日のことである。

小野浜造船所の従業員が、汽車で大阪鉄工所へ駆けつけて来た。アメリカでアレキサンダー・グラハム・ベルが電話を発明したのは1876年、明治九年。その翌年にはアメリカの電話輸出第一号機が日本に輸入されてはいた。この電話機を使って赤坂の工部省と宮内省との間、二キロメートルで試験を行い、明治十一年には国産電話機を完成させ、日本に電話を普及させる準備に着手してはいた。しかし、電話事業が公にスタートするのは明治二十二年の東京・熱海間の一回線のみで、通信省が一般に電話加入者募集を行うのは同二十三年のことである。この明治十六年現在の七年後のことであるから、この時点では、一大事を知らせるには汽車に乗つて知らせに行くのが一番でつとり早い手段であつた。

「キルビー社長が昨日、拳銃自殺しました」従業員がハンターの姿を見るなり、報告する。ハンターの顔からさつと血の気が引く。

「ソレハ本當デスカ？」

信じられない思いのハンターであつた。

「愛子！ キルビーサンガ大変ダ！」

すぐに愛子を呼ぶ。

「小野浜へ行コウ」

取る物も取り合はず、バタバタと出かける準備を整える。

「アナタ、一緒ニオ願イシマス」

キルビーの従業員と共に、梅田から三ノ宮までの車中のとなり、道すがらキルビーの様子を聞

き出すハンターと愛子であつた。

小野浜造船所の事務所にキルビーの遺体が安置されていた。その前で志津がハンターと愛子を迎えた。愛子がそつと駆け寄ると、志津が愛子の胸に顔をうずめるのと同時にあつた。愛子は黙つて志津の肩に手を置くと、その手をやさしく上下に動かしながら、志津にささやいた。

「どう言つていいのか……わからない」

志津は泣くだけである。ハンターは従業員に案内されてキルビーの遺体のそばに近づく。白い布をめくつてキルビーの顔を見る。安らかな眠り顔にこめかみの傷が痛々しい。

「キルビーサン！」

あとは言葉にならない。ハンターは上半身を折つてどどつとキルビーのそばにうずくまる。そつとキルビーの顔を撫でる。冬の大気と同じほどに冷たい。確かに、これまでのキルビーではない。まぎれもなく、命を捨てたキルビーである。ハンターの目に涙があふれてきた。ぬぐうこともままならず、その涙がキルビーの顔にしたたり落ちる。

「ク、ク、ク・・・

ハンターが嗚咽する。生まれ故郷をあとに日本に来て、ずっと世話になり続けてきた恩人のキルビーである。故国で過ごした時間よりこの日本で過ごす時間が長くなつた自分の生きざまに大きな影響をもたらせ続けてきた正真正銘の恩人である。この人との付き合いは何があろうとも生涯続くものと思っていた。いや、確かに、キルビーが死ぬまで付き合いは続いた。だが、思いもかけず、キルビーがこんなにも早く自らの命を絶とうと

は信じられない、いや信じたくない。しかし、現実にここに冷たくなつてもの言わなくなつたキルビーが横たわっている。

「キルビーサン！」

たまらくなつてハンターが叫ぶ。そして、男泣き。そばに寄ってきた愛子の泣き声がそれにかぶさる。志津の泣き声も。取り囲む従業員たちもこらえきれなくなつて泣き出した。海鳴りよりも激しいみんなの泣き声が怒濤の如く小野浜造船所に満ち満ちた。

小野浜造船所の西に加納湾と呼ばれる小さな入江があつた。これは明治四年に私財を投げ打つて生田川の付け換え工事を行なつた加納宗七にちなんで名づけられたものであるが、その西に運上所が位置し、そこから西一帯に兵庫の港が広がつていた。はるか昔に網屋吉兵衛が小野浜に「船ただ場」と呼ばれる木造船の修理場を置いたことはあつたが、生田川を付け換えたころは風波を避ける船入り場がなかつたことから、加納宗七が入り堀を設けて倉庫も建て、明治六年に加納湾を整備していた。この湾の東に隣接してキルビーが明治十一年に小野浜造船所を設けたのであつた。五年の歳月を経過して、まさか、その本人が自殺することは、誰も予想だに出来ないことであつた。滝善三郎の切腹を最後にして、日本の腹切りは終わつたものと世間が思つていた矢先に、外国人のキルビーが拳銃自殺をしたのである。この時代、人が亡くなるとその周辺の地域中にその事實を知らせてまわることが当然の習慣のようになつていたが、まして、キルビーの場合には、思いもかけぬ拳銃自殺であ



雨度公園の小野浜外人墓地～1952年に移転される

る。キルビーと縁もゆかりもない人にとっても、関心を持たざるを得ない一大事件である。噂はたちまち、広まつた。

紺部村から、大工の留吉が、タネと稻次郎を伴って駆けつけて来た。キルビーが兵庫開港前夜にハンターと共に、この兵庫に乗り込んで来た時、二人に宿を提供し、しばらく、二人が居候させてもらった留吉の家族である。当時、十五歳の少年であつた稻次郎が三十過ぎの立派な男性に成長していた。キルビーの遺体のそばに付き添うハンターを見るなり、留吉が駆け寄つて言う。

「お久し振りです」

しかし、言葉が続かない。留吉は手で口を覆い、ぐつと込み上げてくるものを見こらえる。

「留吉サン……」

ハンターも言葉を発せられない。が、顔を見るだけで、気持ちが通じ合う。タネも稻次郎も同じであつた。稻次郎は父親と同じ大工となつていたが、米田左門講師の弟子だけに、ただの大工ではおさまらない。学術的に建築の色々なことを勉強して、その知識を応用した建物を実現して世間から一目置かれる存在となつている。

「米田先生にも伝令を送つておきまし

こんな時に至つても、やはりそつのない動きを見せるのはさすがである。その米田左門が間もなくやつて来た。

「稻次郎、キルビーさんに輿を用意してあげなさい。君は泣いている場合じゃない」

米田の提案に、稻次郎は早速、仲間の協力を取り付けて、白木の柩とそれを載せて運ぶ輿を急ごしらえで用意した。キルビーが息を引き取つてから丸一昼夜が経とうとしていた。従業員は言うまでもなく、その家族をはじめ、キルビーの生前、付き合いのあつた人たちが次々に集まり、小野浜造船所はキルビーの死を悼む多くの人たちでいっぱいになつた。思い思ひにたむける線香の煙がたなびいて、厳粛の気が当たり一面に充満する。

「ハンターさん、キルビーさんに成り代わつてあなた、皆さんに挨拶なさい」

米田がアドバイスする。愛子も同じ思いである。「あなた、ぜひ」

群衆が水を打つたように静まり返る。

「私ハ、キルビーサント一緒ニ永年、働イテキタハンターデス。ダカラ彼ノ氣持ガヨク分カリマス。ダノニ、彼ガビジネスノ途中デ、命終ワラセルコト、想像モ出来マセンデシタ。悔シイデス」

ハンターが言いよどむ。群衆の中に改めてすすり泣きが起こる。

「キルビーサンハ、コノ日本ガ好キデシタ。ダカラ、生マレタ国、イギリスヨリモ日本ノ土ニナルコト選ビマシタ」



三桑杜夫(さんじょうもりゆう)
フリアーナウンサー、放送作家。ルゴブライター
を経て、放送業界へ。経験にもとづく地域活性化講師としての活動も評価されている。
著書「いのち結んで」「宝の道七福神めぐり」、「そうゆう人たち」など。

悲しみが頂点に達する。もはや人目も気にせず、よよと泣きくずれるのは志津である。愛子も泣く。小野浜造船所に多くの人々の泣き声が渦巻く。やがて、稻次郎が用意した柩にキルビーの遺体を從業員たちが入れる。みんなが思い思ひにキルビーの死に顔に別れを告げ、柩が輿に載せられる。十数人の男たちが輿を担ぎ上げて、加納湾の北側にある墓地に向けて動き出す。居留地の東南に位置するその墓地は小野浜墓地で、兵庫開港とともになつて西洋人居留地が形成されるのとほぼ同時に外国人専門の墓地として利用が始まり、西洋人が死ぬとそこに埋葬されるのが決まりのようになつていた。

暮れやすい初冬の夕日が遠く淡路の島影に落ちると、西空に茜色の残照が広がる。小野浜造船所から担ぎ出された輿がゆっくりと西に向かう。提灯行列で数十人が野辺の送り。米田の知り合いの牧師が祈りを捧げて、男たちが掘つた穴に柩が入れられ、その上に土をかぶせると、キルビーはこの異國の地で、今、確かに永遠の眠りについたのであつた。

「キルビー、グッドラック！」

そのつぶやきはハンターが恩人に捧げる次の世での活躍を激励する心からのエールであつた。

つづく